



天
野
順
一
朗

【登場人物】

父
娘
坂本

坂本が、キーボードでタイトルの譜面通りに曲を演奏している。
父と娘が向かい合って食事をとっている。
父は薄いサングラスをかけ、白髪の長髪にパーマをかけている。

娘 お父さん、ひとついいかな？

父 うん。お父さんもお前に、ひとつ聞きたいことがあるんだ。

娘 そう。でも私が先に話を振ったから私からいい？

父 うん。

娘 私、とても感謝しているの。お母さんが死んでから、男手ひとつでここまで育ててくれて、
本当にありがたいな。って。

父 どうした、急に。

娘 スタジオ・ミュージシャンって職業を、私はよく知らないし、お給料だつていくら貰える
ものなのかよく知らないけど、他の友達と同じように大学まで出してもらって。

父 どうしたんだよ。

娘 大学出たのに、こうして働きもせず、部屋に引きこもって再放送のサスペンスドラマと深夜
アニメをひたすら見続ける毎日をごさせていたでいて、こんなどうしようもない私を
追い出しもせずこうしてスタジオ・ミュージシャンの大して高くもない給料で養ってもら
っていること、本当に「ありがとう」って思うと同時に、誠に遺憾であります。

父 カレー、冷めるぞ。

娘 スタジオ・ミュージシャンのお父さんと、ハウス・ガードマンの私。

父 なんだろうな、ハウス・ガードマンと並べられると、なんだか、スタジオ・ミュージシヤ
ンという肩書が途端に後ろめたいメロディライン並べられたようで、心に突き刺さるな。

娘 話、続けていい？

父 続けていいんだけど、なんの話なんだい？

娘 本題はここからだから。ここまでは、私を、お父さんが楽器ジャカジャカ鳴らして稼いだ、
大して高くもないスタジオ・ミュージシャンのギャラで育ててくれたことへの謝辞。

父 うん、さつきからお父さんの職業や給料に対する偏見を感じなくてもいいけど、どうぞ。続
けて。

娘 私が話しておきたいのは、そのお父さんの変化についてね。
父 変化？

娘 (音が止まっていることに気づき) 坂本さん。
坂本 すいません。

坂本、再びキーボードを演奏する。

娘 (音楽家は自分の曲や歌にそつと主張やメッセージを込めるものだと思うの。

父 うん。

娘 逆に、思想やメッセージが大きく出ちゃっている楽曲って、クソダセエと思うんだよね。
言葉がすぎるけど、お父さんも概ね同感だよ。

父 それは楽曲だけに限らないと思うんだ、私。

娘 どういうことだい？

父 お父さん。

娘 ？

父 お父さんも音楽家の端くれなら、私がそつと主張しているメッセージに気づいてほしいん
だよな。

娘 端くれって言葉はひどく相手の自尊心を傷つけるからお止しなさい。

父 坂本さん。

坂本、ゆつくりキーボードを弾く。

父 さつきから一体何なんだい、これは？

娘 それが、お父さんのひとつ聞きたいこと？。

父 いや、これはこの状況に対する純粋な疑問だよ。

娘 そう。でもそれはフェアじゃないわ。私はお父さんにひとつ話してる。そしてお父さんの
聞きたいことはひとつだけ。途中で思いついた疑問をこの流れに投入するのは後出しジャ
ンケンだし、まだ私の話が途中よ、お父さん。

父 いや、だけどね、

娘 私の話はひとつだけ、とても重要なことなの。親子の会話とはいえ、私はひとつのテー
マについて真剣に話しているわけだから、お父さんもそれ相応の覚悟をもってひとつだけ
質問してね。

父 話がよく見えないからさ。君の話に対する純粋な、無邪気な質問はためなのかい？

娘 さつきからお父さんは私のひとつの話にちよいちよい質問を入れ込んで来ているけど、私
にはたまらないの。私が今、話を奏でているのよ。私のソロパートなの。そこに不要な、
稚拙な質問を挟んで、私の話の不協和音を作らないでほしいの、わかる？

父 ごめん。

娘 坂本さん。

父 坂本さん。

娘 坂本さん。

再びキーボードを弾く。

父 誰何だい、この人は一体。
娘 それが私に唯一聞きたいこと？
父 これはだから流れだよ。教えてくれよ。お父さん、帰ってから知らない人がうちのリビングでキーボードを弾いていることがたまらなく不安なんだ。
娘 坂本さんよ。
父 え？
坂本 坂本です。
父 ……はじめてまして。
娘 それでね、お父さん。
父 ちよつと、待ってくれよ。
娘 なあに？お父さん。
父 誰？
娘 お父さん。その質問が、冒頭で私に言った「ひとつ聞きたいこと」なら喜んで答えるわ。でももし本当にお父さんが聞きたいことがあるんなら、この話はそれでいいじゃない。ここで唯一の質問の機会を使ってしまうと、金輪際私はお父さんの質問に答えられなくなってしまう。
父 シビアなんだな。
娘 私はお父さんの子供だから。きつちりがいいの。お父さんのお仕事だってそうでしょ？自分で好き勝手、自由にやりたいなら自分で音楽を作って歌えばいい。でもお父さんはスタジオ・ミュージシャン。アーティストから求められる演奏をきつちりとこなすお父さん。私の大好きな、音楽家の端くれのお父さん。
父 ありがとう。でもスタジオ・ミュージシャンだって立派な音楽家なんだから端くれは止めておくれ。
娘 だからこそお父さんのその変化に、私は少なからず大きな衝撃を受けているの。
父 実はね、お父さんも同じような事を話そうと思っていたんだ。
娘 さすが親子ね。うん、でも今は私のコーナーだから。
父 コーナー？
娘 お父さん。
父 ごめん、また君のメロディラインを乱してしまったね。
娘 カラオケで人が気持ちよく歌っている最中に、勝手に割り込んできてクソ下手なハモリをぶちかますようなものよ、お父さん。
父 クソはお止しなさい。
娘 坂本さん。

再びキーボードを弾く。

娘 お父さん、分かる？私がお父さんに対して抱いているこの感情。
父 おそらく、なんだけど、お前が言う伝えたいことって、今この人がずっと弾いている、このメロディのことなんだよね？
娘 端くれなら分かるはずよ。
父 ああ、もう音楽家でもなく、ただの端くれ呼ばわりなんだね。……えーつと、不安感？
娘 そんなクソみたいな答えじゃないわ。
父 クソはお止しなさい。
娘 この状況で「不安感」などというクソみたいな回答を音楽家の端くれの口から脱糞しないでほしいの。
父 お止しなさい。カレーを食べているんだよ？
娘 サスペンスとアニメにしか興味のない私が、音楽家のお父さんのために、そつと、さり気なく伝えているこのメロディラインを、ちゃんと読み取ってよ。
父 さり気なくって、……えーつと、その、あ、坂本？さん？
坂本 はい。
父 頭からお願いでできますか？
坂本 (ため息)
父 すいません。
坂本、ゆっくり四音を弾く。
父 最初のは、ラのシャープ？シのフラット？
坂本 シのフラットです。
父 あ、すいません。……えーつと、次がラ、その次がド、最後がシ。
娘 で？
父 ……で？
娘 私のメッセージは？
父 えー、……音名かな？Bマイナー、A、C、B。
坂本 惜しい。
父 惜しい？
坂本 ドイツ音階だと？
父 ……えつと、ドイツ音階だと、シがHで、シのフラットがBになるから、B、A、C、H。
娘 ……なんだよ、コレ。
父 人の名前よ。
娘 誰の？

娘 読んでみてよ。

父 ……バツチ？

坂本 惜しい！

父 惜しい、

坂本 ドイツ語読みだと？

父 ……わかりませんよ、ドイツ語なんて。

坂本 (ため息)

父 すいません。

娘 ヨハン・セバステイアン？

父 え？

娘と坂本 ヨハン・セバステイアン？

父 ヨハン・セバステイアン、……バツハ？

坂本、キーボードをピンポンピンポンと鳴らす。

静寂。

父 ……驚いたな。

娘 驚いたでしょう？お父さん自身は音楽家としてさり気なくリスペクトを表明しているつもりでも、バレバレなの。多くの音楽家はこうやって、バツハへのリスペクトを楽譜の中やメロディに巧みに隠しているの。

父 いや。

娘 レコーディングでしばらく家をあけることはいつものことだからどうでもいいの。でも、久しぶりに帰ってきたお父さん、バツハ丸出しなんだもの。いいえ、まんまバツハなんだもの。

父 お前ね、

娘 最初は、あれ？石ノ森章太郎かなって思ったわ。お父さん、サングラスしているから。でも、私にはわかった。石ノ森ではないということが。だってお父さんはスタジオ・ミュージシャンだから。バツハの端くれだから。

父 バツハに端も真ん中もないと思うよ。

娘 さぞ驚いたことでしょう、私の洞察力の鋭さに。なぜなら私はハウス・ガードマンとして日々サスペンスドラマを研究しているから。

父 驚いたのは、この手の込んだ、回りくどい伝え方と、これだけ尺をとった割にどうでもいい内容だったからだよ。

静寂。

娘 ……坂本さん。

坂本、キーボードを鳴らす。

父 静かにしてもらえないかな？

娘 そんな言い方はないんじゃない？

父 何なんだい、この人は。

娘 坂本さんだっていつてるじゃない。

父 なんて坂本さんがいるんだいここに。お父さんがレコーディングから帰って来たら、ずっといるじゃないか。なんなんだい。

娘 止めてよ。

父 坂本さん、出ていってもらえませんか？

娘 なんてヒドいこというの！？

父 出ていきなさい。

娘 バツハだと言われた事で怒ってるの？

父 そんなことで怒っているわけじゃない。

娘 じゃあどうして？

父 お父さんのイメチェンより、もっと大切な話があるじゃないか。

娘 私がハウス・ガードマンということ？

父 それはいい。いや、よくはないけれど、今に始まったことじゃない。いいんだ、お父さん、そんなことはこの際。

娘 じゃあ何よ、お父さん？

父 お前、いつの間に娘になったんだ！

沈黙。

父 たかし。お父さんの変化より、お前の変化のほうが、お父さん、衝撃的だと思うんだ。

娘 どうして？

父 どうして、レコーディングで家を開けて、久々に会ったニートの息子が、お前、娘になってたんだぞ。どういうことなんだ？

娘 そんなお互い様じゃない！お父さんだってバツハになってるじゃない！

父 バツハじゃないよ！

娘 バツハよ！

父 一〇〇歩譲って、バツハだったとしても、バツハもお父さんも男じゃないか。いや、お父さん自身がバツハになったわけじゃない。髪型がそれっぽいだけのことだろう。お前は、もう、全部変わっちゃってるんじゃないか。お父さん、気が付かなかったよ。最初。知

らん人がいるって。知らん男の人もいるし。

娘 坂本さんだって。

坂本 坂本です。

父 うるさいな、坂本は黙ってるよ。

娘 お父さんは、全然わかっていないようだから言うけれど、私がお父さんを見てショックだったのは、お父さんのその、表面的な部分で、安易にバツハになったことを言ってるの。

父 バツハじゃないよ。

娘 音楽家だから、リスベクトだから、だからって、安易に表面的にバツハを気取るのはダメエっていつてるのよ。

父 だから、バツハじゃないよ！ブライアン・メイだよ！

静寂。

父 ブライアン・メイだよ。クイーンのカギリストの。お父さん、「ブライアン・メイみたいにしてください」って頼んだんだよ。バツハになるなんて思っても見なかったよ。

娘 ……ごめんなさい。

父 ……いや、いい。

娘 私、ブライアン・メイがなんなのか、よくわかんないわ。

父 だからクイーンのもの、…いや、いいんだ。そんなことはどうでもいいし、完成したこの頭を美容室の鏡越しに確認した時、「あれ？バツハじゃね？」って一瞬よぎったのは事実だ。

お前は何も間違っちゃいない。少なくとも、お父さんがバツハっぽくなったという点においては。

娘 でも同じことだわ。バツハにしろブライアン・メイにしろ、お父さんがやっていることは表面的なこと、音楽家としてならクリエイティブではない、という事。全くもって本質的ではないという警告をしているの。私は。娘として。

父 たかし！お前はたかしなんだ！バツハになってしまったショックなんて、その後帰宅してみたら息子が娘になっちゃってしまっていたショックとくらべたらどうってことない！重要ではないんだ。お父さんの変化なんて、お前の変化と比べたら、どうでもいいことだし、別にそんな自分の何から何までを音楽制作におけるテーマの練り込み方と結びつけて考えているほど、お父さん音楽のめり込んでない！音楽に人生捧げてるわけじゃない！

娘 ちよっと、プロとしてどうなの？

父 たかし！

坂本 まあまあ。

父 うるせえ出てけ！

娘、コップの水を父にかける。

父 ……たかし。

さらにカリーの入った皿を父に押し当てる。

娘 私の事はどれだけ悪く言ってもらって構わない。けどお父さん、坂本さんを、…私の息子を悪く言うことだけは許さない。

父 ……はあ？

娘 あなたの孫よ、お父さん。

坂本 じいじ。

父 お前、息子って、

娘 お父さんは、やっぱりバツハよ。ブライアン・メイじゃない。私は何も変わっていない。バツハは晩年視力を失いました。そして、視力回復の手術の際のミスが原因で亡くなったんですよ、じいじ。

娘 お父さん、坂本さんはずっといたよ。もっとも昔から。そして、私はずっと娘だった。お父さんには、娘である私が見えていなかった。そんな何も見えていないお父さんでも、音楽という素晴らしい職業をもって、周りからは趣味の延長だとかなんだとか言われながらここまで私を育ててくれた事、本当に感謝してるの。大好きなの、お父さんのことが。

だからこそ許せないの。ビジュアルをバツハしたことが。坂本 ブライアン・メイだというのなら、せめて髪色を茶色にするべきだったよ、じいじ。娘 ダメよ。茶髪にしたら、もうブライアン・メイじゃなくて野沢雅子になってしま

うから。坂本 そっか。

娘 ごめんなさいね、お父さん。話を戻すね。私、お小遣いをもう何十年もずっと貯金していたの。そして行ったの、タイに。それは困難な手術だった。でもそうすることでしか、私は自分の中にいた坂本さんをこの手に抱くことができないってわかってたからがんばれたの。そしてやっと、こうして自分の息子をこの手に抱けるようになったのよ。

と、坂本を抱きしめる。

娘 さ、坂本さん。じいじよ。

坂本 じいじ。坂本だよ。

父 えーっと、その、お父さん、まったくもってこの状況を飲み込めていないんだけど、

娘 いいのよ。大丈夫。私、今とっても幸せだから。

父 タイでお前から出てきた息子って、坂本さんはおちんちんって事でいいのかな？

坂本 じいじ。坂本だよ。

娘 自分の孫に向かっておちんちはあんまりだわ、お父さん。

父 だって、おちんちんだもの。おちんちんがこんな風になるなんて、お父さんはおちんちん切り離したことがあるの？

父 え？

娘 ないでしょ？じゃあ切り離した後のおちんちんがこうなるって、お父さんにはわからないはずじゃない。おちんちんを産み落とした私には分かる。だって今ほら、こうして坂本さんがここに居るんだから。ずっと私のところにいた坂本さんが、ようやくこうして。

父 その、坂本さんってのは一体なんなんだい。

娘 子供に名前をつけるのは、親として当然でしょ？親からの最初のプレゼント。

坂本 お母さん、ありがとう。

娘 いいのよ、坂本さん。

父、一瞬色々考えるが、固まってしまふ。

父 えーっと、……えー、

娘 いいの、考えてはだめ。考えたところでお父さんごときバツハには何もわからないと思うわ。

父 これ、今、どういう状況なのかな？

娘 それぞれひとつずつ言いたいこと聞きたいことを言い合っていたのよ。

父 なんの話をしてたわけ？

娘 お父さんの、そのクソダセエとバツハは、音楽家としていかがなものでしょうか、と娘から忠告していたのよ。

父 そうだったわけ？

娘 あとね、お父さんは、私の事を今までちゃんと見ていなかったって事を自白したの。

父 そうか。……そうか？

娘 カレー、おかわりする？

父 ……いや、いい。

娘 そう。……坂本さん。

坂本 うん。

キーボードを弾く。

娘 お父さん、ごめんね。私大きな変化があったわ。

父 ……そうだね。

娘 私、娘から母になったの。

父 ……あ、うん。そうだね。

娘 そしてお父さんは、じいじになったの。

坂本 じいじ。

父 ……そうか。キーボード好きなのかい？

坂本 ええ。

娘 じいじに似たのね。

父 やっぱりカレー、おかわりもうよ。

娘 はい。

キッチンに向かいながら。

娘 あ、そうだ。明日出かけるね。

父 どこへ？

娘 ハローワーク。ほら、この子を養っていかなくやいけない。

父 ……たかし。

娘 母になって初めて、お父さんの気持ちがわかったのよ。ありがとう、お父さん。

父 ……僕も出かけるよ。

娘 どこへ？

父 この髪型を直しに。

娘 その必要はないわ。

父 だって、お前がミュージシャンとしてクソダセエって。

娘 うん、死ぬほどダセエと思うけど、髪型を変えてくれなんてひとことも言っていないわ。

父 でも、あんなにデイスってたじゃないか。

娘 デイスっただけよ。それよりも、坂本さんを公園に連れて行ってあげてよ。

父 え？

娘 孫とき、キャッチボールしてあげてよ。

坂本 じいじ。

父 いいけど。

坂本 やったーッ！

娘 よかったわねえ、坂本さん。

坂本 ボールもってくるね！

と、坂本出ていく。

娘 こらこら。キャッチボールは明日よ！

父 まさかこんなに早く孫とキャッチボールすることになるとは思わなかったよ。

娘 今の子は早熟なのよ。

父 そうだ。なあたかし。

娘 何？

父 あのな、これからお前のことをなんて呼べばいいんだ？

娘 なんてって、たかしでいいじゃない。

父 でもお前、娘になったんだから。

娘 いいのよ。だってたかしって名前は、お父さんにもらった私の宝物だから。

父 ……たかし。

娘 カレー、大盛りにするね。

父 そんなに食べられないよ。

娘 明日孫と全力でキャッチボールするためにパワー蓄えないとね。

父 キャッチ、なあたかし。

娘 何？

父 坂本さんはおちんちんだったんだよな？

娘 お父さん。

父 いや、キャッチボールつてのが妙に引つかかるんだけどさ。だって、おちんちんだったわけだから。

娘 お父さん、やめて。

父 ボールつて、キンタ、

坂本 じいじーッ！

坂本、巨大なキンタを持ってやってくる。

おわり